から、学校から帰ってくるといつも、「お帰り。」と言ってくれます。

はいしゃの仕ごとをしている時でも、お母さんのすがたを見るだけで、とてもあん心します。ぼくは、そんな明るいお母さんが大すきです。ぼくがわるいことをすると、とてもこわいです。とてもこわくおこられるけど、やっぱりお母さんが大すきです。

どれだけロボットがかんぺきに仕ごとをしてくれても、とてもゆうしゅうでも、人の心の中まではわからないと思いました。それに、本当のお母さんにはなれないのだから、お母さんがいつもぼくのそばにいてくれることが、とてもしあわせだということがよくわかりました。

ぼくのお母さんも毎日いそがしくしているので、ロボママのようには出来ないけれど、お手つだいをしてお母さんをたすけてあげたいと思いました。そして、これからもぼくや家ぞくのために、家の仕ごとやはいしゃの仕ごとをがんばってほしいと思いました。

◆子ぎつねヘレンがのこしたもの

本川根小4年　池本夢実（いけもとゆめみ）

キタキツネの子、ヘレンは目が見えず耳も聞こえない。においや味も感じない。道路わきにうずくまっているところを保護された。どうしてそんなところに一人でいたんだろう。家族とはぐれたのか。それともきびしい野生のくらしについていけず、おいていかれたのだろうか。大声で鳴けば、お母さんがとんで来てくれたかもしれない。でも、ヘレンは鳴かなかった。ヘレンの住む世界を想像してみた。前に夜、停電でまっ暗になった時、私は自分の足が床についていないみたいで声も出せなかった。きっとそんな世界なのだろう。だから、動くことも鳴くこともできないでいたんだろうな。

ヘレンという名前は獣医の竹田津先生がつけてくれた。三重の障害を持っていたヘレンケラーのように、強く生きてほしいと願って。

でも、ヘレンは強く生きるどころか、えさを食べる気力さえない。先生のおくさんが言った。「死にたがっているみたい。」私の心臓がドクンと鳴った。まだ子供なのに、死にたいなんて悲しすぎる。

でも、もし私が光も音も味もにおいもなくし、家族もなくしたらたえられるだろうか。そんな体に生まれたヘレンには、一つでもうれしかった思い出があるのだろうか。私のおじいちゃんも障害があって歩けない。前にぽつりと、「つまらんなあ。死んだ方がいいなあ。」と言ったことがある。びっくりしておじいちゃんを見たら笑っていたからすぐ忘れてしまったけど、あれは本音だったのかもしれない。自由に動ける自分の体に感謝したこともない私は、ヘレンやおじいちゃんにすまない気持ちで一杯になった。

先生のおくさんは、そんなヘレンに聞こえないとわかっていても、やさしく話しかけながら、しんぼう強くえさをあたえた。まるで、サリバン先生だ。おくさんの熱意で、ヘレンはお母さんとくらしていた時のことを思い出した。

お母さんからえさをもらうように、おくさんの手からえさを食べ、おくさんの歩く振動でしっぽをふるようになった。生きる喜びを見つけたヘレン。愛情って目や耳からでなくても伝わるんだな。私もおじいちゃんが楽しく生きられるよう何をしたらいいかこれからもっと考えようと思う。

幸せな毎日が続くと思ったのに、ヘレンはけいれんをおこすようになり、とうとう死んでしまった。先生はなにもしてやれなかったとくやみ、悲しんだ。でも、私は前にマザーテレサのこんな言葉を聞いたことがある。

「本当の不幸は、病気や空腹で死ぬことではない。本当に不幸なことは、だれからも相手にされないことだ。」

保護されなかったら、一人さびしく死ななければならなかったヘレンが、先生とおくさんに温かく見守られ死んでいった。口がきけたら、「ありがとう。私、とっても幸せだったよ。」って言ったと思う。

障害があっても、けん命に生きたヘレンの美しい一生を私も忘れない。